



合唱指揮者が語る 〈第九〉の奥義

三澤洋史

年末恒例の〈第九〉で見事な歌声を披露してくれる新国立劇場合唱団。
劇場の「顔」とも言えるこの合唱団を2001年から率いているのが三澤洋史だ。

本番では黒子に徹する合唱指揮者の視点から、
〈第九〉と日本の合唱文化について語ってもらった。

合唱指揮者は中間管理職 重要な「のりしろ」

——〈第九〉の合唱指揮者は、コンサートの聴衆からは見えにくい存在です。

終演後のカーテンコールの時しか舞台に出て行きませんか。合唱指揮者って、いわば中間管理職なんです。客演でやって来た指揮者は、限られた練習時間の中で合唱まで手が回らないが、自分の意向を合唱にも反映させたい。その意をなるべく汲んで、合唱団のサウンドを事前に作っておくのが僕の仕事です。

——ご自身の音楽解釈が指揮者と異なる

場合はどうするんですか。

それは合唱指揮者の宿命ですね。指揮者が合唱付きの稽古に入った時に、「ダメだ！ ここはこうしてほしい」と注文を出すことがあります。そういう時、優秀でない中間管理職は、ボスの言う通りに「ダメだ！ こうしろ」となる（笑）。しかし、それでは合唱団はついてこない。僕は明日本番があっても大丈夫なように音楽を作り込んでおきますが、仮に指揮者がまったく違うことを言い出した時でも、それまでやってきたものを生かしながら、路線をうまく修正していくテクニックを使います。

——それはどういうものですか。

例えば、音楽の解釈の違いによって、普通なら一つ振りで速く振る箇所を三つ振りでゆっくり振る指揮者もいる。そういう解釈が予測できる場合、3回の練習のうち1回は三つ振りでやっておく。つまり臨機応変に対応できるように「のりしろ」を作っておくんです。〈第九〉で具体例を挙げると、第4楽章の終結部。ベートーヴェンのメトロノーム表記は「四分音符＝60」ですが、プレスティッシモの直前にあるマエストーソ（荘重に）という指示を重視して、伝統的に「八分音符＝60」で振られてきました。でも、指揮者の下野竜也さんなどは原典に忠実で、そのまま「四分音符＝60」で振りますから、伝統的な解釈の2倍のテンポになる。そういうことも想定して準備しておくんです。

すべてが難しい〈第九〉 予定調和はあり得ない

——〈第九〉の合唱で一番難しいところはどこでしょうか。

すべてが難しい。その最大の理由は、そもそも合唱パートが非常に歌いにくく書かれているという点にあります。例えば、第4楽章中間部のア・ラ・マルチャ（行進曲風に）の後、“歓喜の歌”を再び全員で歌う箇所。ソプラノ・

パートはファ、ファ、ソ、ラ、ラ、ソ、ファ、ミ……と繰り返しますが、あの高音域を絶叫せずに、きちんと「フロイデ シューナー ゲッターフンケン……」と聴き取れるように歌うには、最上級のテクニックが求められる。本来ならアマチュアに歌えるものではありません。

——〈第九〉はいろんな意味で特別な音楽ですね。

僕はいつも〈第九〉の稽古の最初に、こう話します。シラーが“歓喜の歌”の原詩を書いたのは1785年。フランス革命が起こる4年前で、彼は最初、「乞食と王侯は兄弟になる」と書いた。封建的な抑圧から人々が解放され、「すべての人々は兄弟となる」。ベートーヴェンが“歓喜の歌”を作曲した1820年代初頭には、自由と平等を欲求する革命の熱狂がまだ持続していた。壮大な人類愛を掲げ、皆が団結して立ち上がる。それが〈第九〉です。だから、お決まりの年中行事みたいに安易な気持ちで歌ってほしくない。もっと熱狂的に演奏してほしい。この曲に予定調和的な終わり方はありません。それならやらない方がいいくらいだ、と。

——ドイツでは〈第九〉はどのように歌われているのでしょうか。

僕は1999年から2003年まで、バイロイト音楽祭で合唱指揮のアシスタン

トをしていました。その間、2001年に第二次大戦後に音楽祭が再開されてから50年を記念する〈第九〉の特別演奏会があったんです。その時に稽古をつけることになった。ところが、合唱団員のうち過去に〈第九〉を歌った人は半分もいない。生まれて初めてという人もいた。だから、スタッカートの箇所ですらどこにドイツ語の子音を入れるかといった、かなり細かい指導から始めたんですが、最初は正しい音が全然取れない。こりゃ大変だと思ったんだけど、ある時点から急激にうまくなったんです。あれは衝撃的でしたね。

——それはどういうことですか。

それまで日本では、ドイツ語にもっと表情を付けて歌うよう指導をしていました。単に「フロイデ」と歌うのではなく、言葉そのものがポンと立体的に立ち上がってくるように、といったように。ところがドイツでは、合唱団員が歌詞の内容を理解してくると、「フロイデ シューナー ゲッターフンケン」と歌うところで、何も言わなくても「フロイデ」に気持ちを込める人、「フンケン」に気持ちを込める人、いろいろ出てくるんです。すると音楽全体がいわば「玉虫色」に光り輝くんです。その彫りの深さといったら……。本番を指揮したのはクリスティアン・ティーレマンだったんですが、これがまた、日本で聴いてきた〈第九〉



思いの深さが日本人とは全然違う。どうしたら、あの深い感情を日本で表現することができるのか？ それからしばらくは失望と絶望の連続でした。

——日本人が外国語で歌う時に直面する根源的な問題ですね。

希望の光が差したのは2011年、イタリアのミラノ・スカラ座で3か月ほど研修した時のことです。そこでドイツとは異なる合唱指導を目の当たりにしました。彼らは皆ベルカント（美声と高い技巧を兼ね備えたイタリア式の歌唱法）で歌うんですが、それができるとヴェルディやロッシーニだけでなく、ワーグナーやモーツァルトもきれいに歌える。つまりベルカントは普遍的なテクニックだということに気付いた。それまで「ワーグナーは暗い音色で歌って」みたいな指導をしていたんですが、そういう日本人には感得しにくい内面的なことからいったん離れて、もっとテクニックを磨いてみたらどうだろうと考えた。そこでベルカントを取り入れた指導を始めたら、まず

とはまったく違うものだった。演奏者一人ひとりの音楽や言葉に対する

合唱団員のモチベーションが上がった。ベルカントで歌えるようになると、不思議と自分がうまくなったような気がするんです。その結果、より歌いやすくなり、全体のクオリティも上がりました。

自ら〈指環〉を指揮 「玉虫色」の響き大切に

——ワーグナーと言えば、ご自身でもオーケストラを指揮して名古屋で〈ニーベルングの指環〉4部作の上演に取り組まれていますね。

合唱指揮者は舞台上での合唱団の動きにも責任を持ちますから、必然的に舞台芸術のいろんなことに関わってくる。そうするうち、自分の思うように好きな音楽をやりたいという気持ちが強くなってきました。愛知万博をきっかけに結成された愛知祝祭管弦楽団というアマチュア・オーケストラがあるんですが、そこで2013年に〈パルジフ



2016年9月11日、愛知祝祭管弦楽団

アル〉全曲を演奏会形式で上演したのがきっかけで、今度は〈指環〉を全部やろうという話になったんです。9月11日に〈ラインの黄金〉を愛知県芸術劇場でやったばかりで、今は来年6月11日に上演する〈ワルキューレ〉に取り掛かっています。練習は月1回ですが、最初にワーグナーのライトモチーフについて入念に講習します。こんなにじっくり時間をかけて音楽に取り組めるのはアマチュアならではのですね。

——日本の合唱は世界的にみても高い水準にあると言われますね。

それは事実です。合唱コンクールの審査員をしても感じます。高校生なんか、ほんの些細なミスもなく、素晴らしい響きで仕上げてくる。でも、まさにそこに問題が潜んでいます。楽譜を丹念に読み込み、皆が同じように完璧な音程とリズムで歌う練習を重ねて100点満点を取ったと勘違いしてしまうと、音楽の本当の奥深さ、果てしなき道に気付かず終わってしまう。

「玉虫色」の響きこそが大事なことです。技術的に完璧に歌えることが音楽家の頂点ではないということがわかって、ようやく本当の音楽家の道を歩み始めることができる。新国立劇場合唱団の活動を通じて、その道しるべを日本の合唱界に示すことができればいいと思っています。（文責・事務局）

心に残るクラシック

篠田節子 —— ④ 〈最終回〉

Setsuko Shinoda

生演奏で聴く魔法

ショスタコーヴィチ：交響曲第10番



結婚以来、三十数年、自宅で音楽を聴くのはラジカセで、それが壊れた後はパソコンと小さなスピーカーの組み合わせになっている。

ショスタコーヴィチの交響曲もそうした再生装置でしか聴いていない。深夜、フレアワンピースの裾上げやシャツのボタン付けのような繕い物をしながら流していた。古典派、ロマン派の交響曲に比べて低弦が活躍するところが気に入っている。重厚で緊張感の高い響きに引きこまれ、かと思えば、不意打ちのように現れる悪ふざけめいたリズムと旋律に、にんまりする。そんなところに交響曲第10番を生演奏会で聴く機会があった。

図版と実物で全く印象の異なる絵画がある。精巧で優美な宮廷画で知られるベラスケスの絵を美術館で至近距離から見ると、何とも荒っぽくざっくりしたタッチで描かれていて驚かされる。だが一歩退くと、豪快な絵の具の

塊が人の肌の艶^{つや}に変わる。画集ではそこにある魔法が見えない。

同じことが貧弱なスピーカーによる再生と生演奏の間で起きた。冒頭の低弦の主題からして、何か起こりそうな不気味な気配が漂っていてぞくりとした。進むにつれ、深夜、貧弱な再生装置から流れていた、あの重く、荒涼とした気分の曲が一変した。

舞台に目を凝らしていると、金色のラッパがゆっくりこちらを向く。輝かしい音色が響き渡る。フルートとピッコロのこんな旋律があったのかと身を乗り出す。さきほど鍵盤のようなものを叩いていた打楽器奏者がのそりと立ち上がる。うろうろとカバーを外すような動作をしている。銅鑼^{どら}か？ あんなものを鳴らすのか？ どこの部分で？

「船が出るぞ」、ジャンジャン、ではなかった。鼓膜破りの大音量、嵐のようなフォルティッシモの中、一度か二度、



ロジェストヴェンスキー指揮による読響のショスタコーヴィチ〈交響曲第10番〉(9月26日、サントリーホール)

ぶっ叩くと奏者はそろりと席に戻る。

視覚情報なし、しかもマンションの上下左右の住人に配慮して音量を絞り、針仕事のBGMにしていたときはまったく別物の、複雑な構造と変幻自在な表情を持つ、存外に景気のいい音楽が現れた。二次元の図面から立体が立ち上がる。そんな感じだ。

ぼうぜん^{ぼうぜん}としたまま1時間を超える曲が終わっていた。交響曲は演奏会場で聴くものだ、とあらためて思ったが、実はショスタコーヴィチの交響曲を演奏会で聴いたのは、今回が初めてではない。

4年前に第5番を聴いている。ソビエト体制下で、スターリンに圧力をかけられ迎合的に作られたプロパガンダ音楽。昔はそう見做^{みな}されていたが、研究が進むにつれ、この曲に込められた重層的な意図が明らかになっていく。とはいえ見識無き権力者の下で、絶望的な抵抗を試みた悲劇的作品といったネガティブな印象がつきまっていた。しかもテレビで何とも勇ましい部分だけを断片的に視聴したこともあ

り、藤田嗣治^{つぐはる}の戦争画のようなものと思っていた。ところが音響設備のあまり良くない会場で全楽章通して聴いた5番は、なかなか良かった。何も情報を与えられなければ、作曲家一番の人氣曲になりそうだ。少なくとも現代音楽の大家が作ったドラマのテーマ音楽と芸術作品ほどの乖離^{かいり}はない。

ふと、ステューヴン・キングの『ミザリー』という小説を思い出した。気の狂った女性ファンに監禁された小説家が、渾身の文学作品の生原稿を目の前で焼かれ、凄惨^{せいさん}な暴力の下、女の求めるわかりやすい大衆小説を書かされる。小説家は最終的に救出され、苦痛と屈辱の詰まったその作品も出版されることになるのだが、そのとき編集者は請け合う。それは間違いなく世界最高のベストセラーになるだろう、と。のみならず内容も、神に跪^{ひざまず}き感謝しなければならぬほど凄^{すご}いものだ。

文化を創り出す者が常に内外に抱える矛盾と苦境は、分野を問わない。

◆次号からは猪木武徳^{いの きたけのり}さんです。

◎コンサートマスター

小森谷 巧

Takumi Komoriya

指揮者と音楽を共有し集中する
雰囲気作り

「12月といえば、日本ではベートーヴェン〈第九〉のシーズン。もう何回ぐらいこの曲を演奏しましたか」

正確ではないですが、プロの音楽家になって290回ぐらいです。音楽祭と他の楽団での演奏も含めると。でも、指揮者によってテンポが違ったり、オーソドックスな人、新しい解釈を試みる人など様々です。読響はレベルの高い指揮者が来てくれるので、毎回すごく楽しみにしています。7回連続演奏をしても、毎回ちょっとずつ違うんです。指揮者は自分がやりたい音楽を表現しますが、回数を重ねるうちに読響の特色を感じて、まとめていく人もいます。今年の指揮者マルクス・シュテンツは初めてで楽しみです。

「〈第九〉の聴きどころは？」

「〈第九〉と言えば第4楽章が有名ですが、そこに至るまでが凄い音楽だから第4楽章が生きてくる。読響は常に熱く、最初から100%の力でみんな熱演するオーケストラです。ぜひ、その辺を

目で、耳で楽しんでほしいと思います。《小森谷さんは茨城県古河市出身。父は藤原歌劇団の歌手、母はピアニストという音楽一家に育ち、3歳からヴァイオリンを学んだ》

親が経営している音楽教室が自宅と同じ敷地にあり、両親も兄もみんな音楽好きだったので、自然に音楽の世界に入りました。小学校に入ったら、音楽をやっていない子がクラスに一杯いてびっくりしたほどです（笑）。

サッカー部や野球部に入りたかったけど、東京まで1時間半ぐらいかけて毎週レッスンに通っていたので時間がなくて。子供のころ、楽器の練習を苦痛に感じたことはありません。がむしゃらに練習したという記憶もない。音楽で遊んでいたという感じですかね?! 実は今でもそうなんですが……。

《桐朋学園ディプロマコースを経て、ウィーン国立音大へ。ロンドン時代を含め欧州生活は計7年。帰国後、東京交響楽団のコンサートマスターを12年間務め、1999年に読響のコンサートマスターに就任した》

若い頃は、先輩のコンマスとか、世界の名だたるコンマスの映像を見て真似したり、自分なりのマニュアルを考えたりしたこともありましたが、でも、



今は、大切なのは指揮者によって変わる音楽にオーケストラの方向性を合わせることに、そして普段の雰囲気作りと思っています。みんなと同じように音楽を感じとって、一緒に音楽に集中するための役目というか。みんなをぐいぐい引っ張るのではない。年を取って変わってきました。指揮者の音楽に一つになれるための橋渡し役みたいな感覚です。指揮者がカバーしきれない部分、バランスやテンポなどを管楽器の奏者に言いに行くことも。「ここから聴くと少し遅く感じるのでもっと早く出てみられる?」と。そんな風にオーケストラは皆で創るものだから、毎日変化します。それが面白いんです。《入団した当時と比べると読響は随分

変わったでしょうね》

入団時とは比較にならないほどいいオーケストラになったと思います。演奏の質が凄くいい。昔から指揮者は世界のトップクラスが来ていたのですが、演奏はいい時と悪い時の差があった。今は本当にアジアナンバーワン、間違いありません。読響のいい特徴は三つあると思う。一つは先ほど述べたように、熱演型であること。ベルリンでも、日本の小さな町でも全力で演奏します。二つ目は派閥が少ないこと。もう一つは、年功序列がない。一番前に若手が座ろうと、だれがコンマスになろうと関係ない。いい意味で若手とベテランが刺激し合っていると感じます。

《昨年、昭和音大の教授に就任した。最近の若者の演奏能力は?》

僕らのころと違って、小学生がバガニーニとか〈カルメン幻想曲〉とか普通に弾いている。どうなっちゃったかな（笑）。読響のオーディションも何十人も受けにきて、みんな上手い。でもね、大事なことは、どういう風に自分を出せるかです。どんな音色でどういう音楽をしたいかを持っている人が勝ち。演奏の技術力は確かに高まりましたが、音楽家としての能力を持つ若者の数は昔も今も変わらない。個性豊かな若者がどんどん出てくることを期待しています。

カンブルランが、よみうり大手町ホールに初登場！

1/20 (金) 19:30 第13回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※19:00から解説

《カンブルラン指揮の小編成オーケストラ》

ロッシーニ：歌劇〈セビリアの理髪師〉序曲

ウェーバー：クラリネット協奏曲 第2番 モーツァルト：交響曲 第40番

指揮：シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者） クラリネット：藤井洋子（読響首席）



藤井洋子

シリーズ600回目を記念する《フランス音楽の精華》

1/25 (水) 19:00 第600回 名曲シリーズ
サントリーホール

デュカス：舞踊詩〈ラ・ベリ〉 ドビュッシー：夜想曲

ショーンソン：交響曲

指揮：シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）

女声合唱：新国立劇場合唱団



シルヴァン・カンブルラン

約130人の超巨大編成による傑作を、遂に読響で！

1/31 (火) 19:00 第566回 定期演奏会
サントリーホール

メシアン：彼方の閃光

指揮：シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）



シルヴァン・カンブルラン

チャイコフスキーの名曲で、カンブルランのタクトが冴える！

2/4 (土) 14:00 第194回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

2/5 (日) 14:00 第194回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲、交響曲 第5番

指揮：シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者） ヴァイオリン：シモーネ・ラムスマ



シモーネ・ラムスマ

4623本の巨大パイプオルガンと管弦楽による華麗な響き

2/11 (土) 14:00 第93回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

ドビュッシー：小組曲

サン＝サーンス：チェロ協奏曲 第1番、交響曲 第3番〈オルガン付き〉

指揮：小林研一郎（特別客演指揮者） チェロ：宮田 大



小林研一郎

1月 2月 公演の聴きどころ

1月の演奏会には常任指揮者カンブルランが来日。25日の《名曲シリーズ》は、節目の600回に当たる。“色彩の魔術師”が得意のフランス音楽名曲選をお届けする。冒頭のファンファーレが有名なデュカスの舞踊詩〈ラ・ベリ〉で幕を開け、繊細な美しさと華麗な響きが魅力のドビュッシー〈夜想曲〉で、精妙な世界を繰り広げる。後半では実演の機会が少ないショーンソンの交響曲に光を当て、ワーグナーやフランクの影響が見られるロマンティックな作品の魅力に迫る。読響では、1968年1月以来49年ぶりに取り上げることになる。

31日の《定期演奏会》では“メシアンのスぺシャリスト”カンブルランが、メシアン晩年の大作〈彼方の閃光〉を鮮やかにさばくだろう。フルート、クラリネット、打楽器にそれぞれ10人を要するなど約130人の巨大編成のオーケストラを、巧みにリードしていく。2017年はメシアン没後25周年で、また当団が創立55周年を迎えることを記念し、11月にはメシアン唯一の歌劇〈アッシジの聖フランチェスコ〉（演奏会形式・全曲日本初演）にカンブルランと挑む。今回の〈彼方の閃光〉は“アッシジへの道”の第一歩でもあるのだ。壮麗な音世界をどうぞお聴き逃しなく。

2月4日・5日の《マチネーシリーズ》では、カンブルランが「オール・チャイコフスキー・プログラム」を披露する。運命との戦いと勝利を壮大に歌いあげる交響曲第5番では、鮮烈な切り口で作品の奥深さを満喫させてくれるだろう。新たな発見や驚きにご期待を。前半のヴァイオリン協奏曲では、シカゴ響などと共演するオランダの名花ラムスマが読響に初登場。銘器ストラディヴァリウスの艶やかな音で魅せる。

11日の《みなとみらいホリデー名曲シリーズ》では、“炎のマエストロ”小林研一郎がサン＝サーンスの交響曲第3番〈オルガン付き〉で、同ホールが誇るパイプオルガンと管弦楽が織りなす圧倒的な響きを演出する。国内の若手ナンバーワンの呼び声が高いチェリスト、宮田大との同じ作曲家によるチェロ協奏曲第1番も聴きものだ。

（文責：事務局）

読響チケットWEB

検索

下野竜也が万感の想いを胸にブルックナーを振る!

3/9 (木) 19:00 第16回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール (大阪)

3/10 (金) 19:00 鳥取特別演奏会
とりぎん文化会館 梨花ホール (鳥取)

3/11 (土) 18:00 読響名曲シリーズ 福岡公演
アクロス福岡シンフォニーホール

モーツァルト: ヴァイオリン協奏曲 第3番

ブルックナー: 交響曲 第7番

指揮: 下野竜也 (首席客演指揮者)

ヴァイオリン: アレクサンドラ・スム



下野竜也



アレクサンドラ・スム

首席客演としての最終公演。〈新世界〉で有終の美を飾る

3/18 (土) 14:00 第195回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

3/19 (日) 14:00 第195回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

3/20 (月祝) 14:00 第94回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

パッヘルベル: カノン

フィリップ・グラス: ヴァイオリン協奏曲 第1番

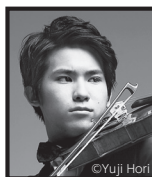
ドヴォルザーク: 交響曲 第9番〈新世界から〉

指揮: 下野竜也 (首席客演指揮者)

ヴァイオリン: 三浦文彰



下野竜也



三浦文彰

新シーズンはカンブルラン指揮〈巨人〉で、華麗に開幕!

4/8 (土) 14:00 第196回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

4/9 (日) 14:00 第196回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ハイドン: 交響曲 第103番〈太鼓連打〉

マーラー: 交響曲 第1番〈巨人〉

指揮: シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者)



シルヴァン・カンブルラン

ドラマティックに描かれるバルトークの魅惑的で耽美な世界

4/15 (土) 18:00 第567回 定期演奏会
東京芸術劇場コンサートホール

メシアン: 忘れられた捧げもの

ドビュッシー: 〈聖セバスティアンの殉教〉交響的断章

バルトーク: 歌劇〈青ひげ公の城〉(演奏会形式)

指揮: シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者)

ユディット: イリス・フェルミリオン (Ms)

青ひげ公: バリント・ザボ (Br)



イリス・フェルミリオン



バリント・ザボ

ウィーンの俊英が初登場&ショパン・コンクールの覇者が共演

4/21 (金) 19:00 第601回 名曲シリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

4/23 (日) 14:00 第95回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

ウェーバー: 歌劇〈魔弾の射手〉序曲

グリーグ: ピアノ協奏曲

ドヴォルザーク: 交響曲 第7番

指揮: サッシャ・ゲッツェル

ピアノ: ユリアンナ・アヴデーエワ



サッシャ・ゲッツェル



ユリアンナ・アヴデーエワ

こんなに便利! 読響チケットWEB

読響チケットWEBは、インターネットから読響のチケットをお求めいただける専用ウェブサイトです。24時間いつでもお申し込みができ、ご自身でお好みの座席をお選びいただけます。

以下のURLもしくは公式ウェブサイトのトップページ【読響チケットWEB】のボタンから、ぜひご利用ください。

読響チケットWEB <http://yomikyo.pia.jp/>

※初回お申し込み時は利用登録(無料)が必要です。

お申し込み・
お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390
(10:00~18:00/年中無休)
ホームページ・アドレス <http://yomikyo.or.jp/>

フレッシュ名曲コンサート こもれびニューイヤー・コンサート

■1/7 (土) 15:00 保谷こもれびホール

指揮：大井剛史 ヴァイオリン：周防亮介

チャイコフスキー／歌劇〈エフゲニー・オネーギン〉より“ポロネーズ”

チャイコフスキー／ヴァイオリン協奏曲 ベートーヴェン／交響曲 第7番

[料金] 一般 ¥3,600 高校生以下 ¥2,000

[お問い合わせ] 保谷こもれびホール 042-421-2323

東京音楽コンクール優勝者&最高位入賞者コンサート

■1/9 (月・祝) 15:00 東京文化会館

指揮：園田隆一郎 ピアノ：チョン・キュビン

チューバ：木村皓一 バリトン：アン・ジョンミン

クーツィール／チューバと弦楽オーケストラのための小協奏曲

トマ／歌劇〈ハムレット〉から“酒よ憂さを晴らせ”

ベートーヴェン／ピアノ協奏曲 第3番 ほか

[料金] 指定 ¥2,000 25歳以下 ¥1,000

[お問い合わせ] 東京文化会館チケットサービス 03-5685-0650

ニューイヤーコンサート2017 「名曲で綴る新春の贈りもの」

■1/15 (日) 15:00 川口リリア・メインホール

指揮：下野竜也 ピアノ：横山幸雄

チャイコフスキー／バレエ音楽〈くるみ割り人形〉から“行進曲”“金平糖の踊り”
“花のワルツ”

ラフマニノフ／ピアノ協奏曲 第2番 チャイコフスキー／交響曲 第5番

[料金] S ¥4,000 A ¥3,000 B ¥2,000

[お問い合わせ] リリア・チケットセンター 048-254-9900

東京芸術劇場シアターオペラ vol.10 全国共同制作プロジェクト

■2/18 (土) 14:00、2/19 (日) 14:00 東京芸術劇場コンサートホール

指揮：ミハエル・バルケ 演出：笈田ヨシ

出演：小川里美(2/18)、中嶋彰子(2/19)、鳥木弥生、

サラ・マクドナルド、ロレンツォ・デカーロ、ピーター・サヴィツジ ほか

プッチーニ／歌劇〈蝶々夫人〉(新演出、全幕・日本語字幕付原語上演)

[料金] S ¥10,000 A ¥8,000 B ¥6,000 C ¥4,000 D ¥3,000 E ¥1,500
SS ¥12,000

[お問い合わせ] 東京芸術劇場ボックスオフィス 0570-010-296

読響は2017年4月に創立55周年を迎えます。これを記念して2017年度(2017-18シーズン)は、例年に増して充実した演目を準備しています。名曲シリーズ、土曜マチネー／日曜マチネーシリーズとも、聴きものが目白押しです。

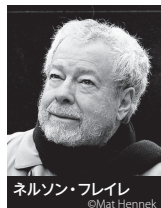


名曲シリーズ



豪華なソリスト

2017年度シーズンの《名曲シリーズ》最大のポイントはソリストの豪華な顔ぶれです。世界水準のラインナップをお楽しみください。



ネルソン・フレイレ
©Mat Hennek



飯守泰次郎
©読響



ユリアンナ・アヴデーエワ
©Christine Schneider

ブラジル生まれの名ピアニスト、ネルソン・フレイレは、ブラームスのピアノ協奏曲第2番で円熟を極めた豊かな風格を示します(7月)。ドイツ・ロマン派の解釈で定評あるベテラン、飯守泰次郎がタクトをとり、演奏会後半でワーグナー作品の名場面を特集するのも話題を呼びそう。名曲シリーズ1回のみの登場です。

2010年のショパン国際ピアノ・コンクールで優勝したロシアのユリアンナ・アヴデーエワは、グリーグのピ

アノ協奏曲で華麗にシーズンの幕開けを飾ります(4月)。

ヴァイオリンではラトビア出身の巨匠、ギドン・クレーメルが目玉(9月)。日本のオーケストラと共演する希少なチャンスです。演目はミニマル・ミュージックの大家、フィリップ・グラスの《ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲》で、彼一流の先鋭な感覚が全開となります。この作品も、名曲シリーズ1回のみの公演です。

読響常任指揮者シルヴァン・カンブルランが、日本でも人気が沸騰するイザベル・ファウストと組むブラームスのヴァイオリン協奏曲(18年1月)や、読響名誉指揮者ユーリ・テミルカーノフが自ら指名したスペインの若手、レティシア・モレノと共演する



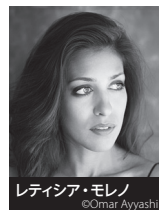
ギドン・クレーメル
©Yukio Kojima



イザベル・ファウスト
©Detlev Schneider



ユーリ・テミルカーノフ
©読響



レティシア・モレノ
©Omar Ayyashi



グザヴィエ・ドゥ・メストレ
©Udo Titz



宮田大
©Yukio Kojima

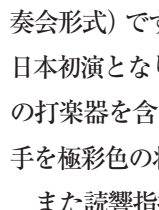
プロコフィエフのヴァイオリン協奏曲第2番にも、関心が高まります(同2月)。

ハープの名手、グザヴィエ・ドゥ・メストレは、もともとギターの名曲であるロドリゴ《アランフェス協奏曲》をハープ版で鮮やかに弾きこなします(5月)。国内の若手チェリスト筆頭格の宮田大は、ショスタコーヴィチのチェロ協奏曲第1番を切れ味よく仕上げます(6月)。

充実の指揮者陣



シルヴァン・カンブルラン
©読響



シルヴァン・カンブルラン
©読響

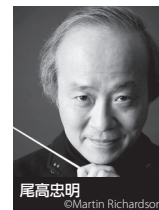
また読響指揮者陣は、こぞって人気シンフォニーに取り組みます。名誉指揮者のテミルカーノフが振るドヴォルザーク《新世界から》(18年2月)、名誉客演指揮者の尾高忠明によるブラー

ムス交響曲第1番(5月)、特別客演指揮者の小林研一郎が完全燃焼するベルリオーズ《幻想交響曲》(18年3月)に加え、カンブルランのスタイリッシュなベートーヴェン《運命》(同1月)と、手応え十分です。

年末恒例のベートーヴェン第9交響曲を指揮するのは、フランスの名匠、エマニュエル・クリヴィヌ。近年は作曲当時の古楽器演奏を研究し、芸風を広げています。

読響初登場の新鋭指揮者にもご注目を。オーストリア出身のサツシャ・ゲッツェルはドヴォルザークの交響曲第7番など(4月)、スウェーデン出身のダニエル・ブレンドゥルフはリムスキー＝コルサコフの交響組曲《シェエラザード》ほか(6月)を聴かせます。

2017年度の演奏会場はサントリーホールの改修工事に伴い、4～9月が東京芸術劇場、11月以降がサントリーホールとなります。



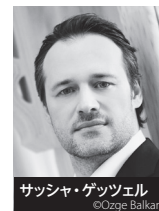
尾高忠明
©Martin Richardson



小林研一郎
©読響



エマニュエル・クリヴィヌ
©Christian Aschman



サツシャ・ゲッツェル
©Orge Balkan



ダニエル・ブレンドゥルフ
©Marco Borggreve

名指揮者で名曲を

週末の午後に東京芸術劇場で開く両シリーズは、親しみやすい名曲を選びすぐりの音楽家でお届けするのがポイント。2017年度も魅力的なラインナップです。



シルヴァン・カンブルラン

読響の指揮者陣では、常任指揮者のシルヴァン・カンブルランが2度、登場します。4月はマーラー初期の人気作、交響曲第1番〈巨人〉をメインとし、前半ではハイドンのユーモアが随所に顔を出す交響曲第103番〈太鼓連打〉を演奏します。

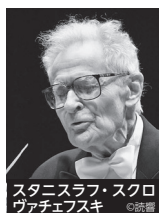
18年1月は“ニューイヤー・コンサート”仕立てで、カンブルランとは初の試み。ヨハン・シュトラウスⅡ世のワルツ〈美しく青きドナウ〉などウィーンものの間に、マエストロの得意なフランス音楽を配します。デュカスの交響詩〈魔法使いの弟子〉やオッフェンバックの喜歌劇〈天国と地獄〉序曲が洒落たムードを加えます。



コルネリウス・マイスター

この年度から首席客演指揮者に就くドイツ期待の若手、コルネリウス・マイスターは、ベートーヴェン〈田園〉

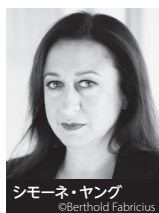
交響曲を核としたプログラムを、みずみずしく聴かせます(9月)。93歳を迎えた桂冠名誉指揮者、スタニスラフ・スクロヴァチェフスキは、ベートーヴェン〈英雄〉交響曲を精緻に響かせるでしょう(5月)。



スタニスラフ・スクロヴァチェフスキ

名誉指揮者のユーリ・テミルカーノフが手掛けるのは、お国物のロシア音楽。ラフマニノフの交響曲第2番では濃厚なうねりが聴き手を包みます(18年2月)。特別客演指揮者の小林研一郎は得意のチャイコフスキーから交響曲第3番〈ポーランド〉を披露します(7月)。

客演指揮者もバラエティ豊か。ドイツのハンブルク国立歌劇場支配人などを務めた女性指揮者、シモーネ・ヤング(6月)と、ベネズエラの音楽教育システム「エル・システマ」出身の気鋭、ディエゴ・マテウス(12月)の二人は読響初登場です。前者はブラームスの交響曲第2番を中心とした本格的なドイツもの、後者はガーシュインやラヴェル作品による楽しいプログラムを用意します。



シモーネ・ヤング

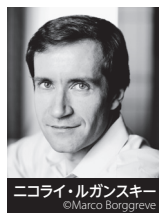


ディエゴ・マテウス

多彩なソリストたち



ダニール・トリフォノフ



ニコライ・ルガンスキー



ケイト・リウ



アラベラ・美歩・シュタインバッハー



謙=デイヴィッド・マズア

出演する多彩なソリストも見逃せません。ピアノでは、ロシアからダニール・トリフォノフ(9月)にニコライ・ルガンスキー(18年2月)と、二人の名手が来演。前者はダイナミックな技巧が炸裂するプロコフィエフのピアノ協奏曲第2番を、後者はおなじみチャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番を取り上げます。2015年のショパン国際ピアノ・コンクールで第3位に入ったケイト・リウは、縁が深いショパンのピアノ協奏曲第1番を巨匠スクロヴァチェフスキと叙情的に奏でます(5月)。

ヴァイオリンでは伸び盛りの若手、アラベラ・美歩・シュタインバッハーがメンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲を、謙=デイヴィッド・マズアの指揮で演奏(18年3月)。個性派のネマニャ・ラドウロヴィチ(6月)、

NHK大河ドラマ「真田丸」のテーマ曲演奏でも名を上げた三浦文彰(18年1月)にも、興味が集まりそうです。

様々なキャリアを重ねてきた人気チェリスト・遠藤真理は、“炎のマエストロ”小林研一郎とのコンビでドヴォルザークのチェロ協奏曲に挑みます(7月)。両者が丁々発止と火花を散らす熱演になりそうです。



ネマニャ・ラドウロヴィチ



三浦文彰



遠藤真理

目新しいところでは、伝説的なジャズ・フュージョン・グループ「ウェザー・リポート」でドラマーを務めたピーター・アースキンが、自らに献呈されたドラムス協奏曲〈アースキン〉(ターネジ作曲)の日本初演に臨みます(12月)。指揮は南米出身のマテウスで、リズムの躍動する快演が期待されます。

年末の風物詩、ベートーヴェンの〈第九〉交響曲では、プロ合唱団として高い評価を得る新国立劇場合唱団(合唱指揮=三澤洋史)が、フランスのベテラン指揮者、エマニュエル・クリヴィヌのもとで“歓喜の歌”を高らかにうたいあげます。



ピーター・アースキン